特別企画

数字では見えない「育ち」を支える保育実践

どこまでも保育や子どもを探究して地域の親子の笑顔を追いかけ続ける

「スーパー保育者をめざす」と公言して地域の親子に寄り添い続ける保育者がいます。沖縄女子短期大学で助教を務めるとともに、フリーの保育者として活動する「バムちゃん」こと、羽地知香先生。とことんまで子ども目線にこだわるその保育のスタイルは、数々の経験で得た出会いと学びが紡がれて、生み出されたものでした。

沖縄女子短期大学助教 **羽地知香**先生（はねじ・ちか）

静岡県生まれ。「バムちゃん」というニックネームは、絵本『ロッタちゃん』シリーズに登場する豚のぬいぐるみ「バムセ」が由来。静岡県内で幼稚園教諭として勤務した後、結婚を機に沖縄県に移住。非常勤保育士を経て健診事後教室などで障がい児保育に深くかかわる。2017年より「木漏れ日喫茶」の活動をスタート。沖縄女子短期大学では非常勤講師を経て、2019年度に児童教育学科助教に就任。

小さな畑の木漏れ日の下で、思い思いの遊びを繰り広げる

子どもに関する専門家が集まって自由な遊び場をプロデュース

沖縄県那覇市首里の静かな住宅街にある小さな畑で、月１回ほど開催される「木漏れ日喫茶」。地域の親子が集まって、季節に応じた活動や遊びを楽しむイベントが行われています。グアバやコーヒー、パッションフルーツといった果樹が植えられた畑には、切り株や水たまりがあったり、カエルや虫たちが顔を出したりと、子どもたちの好奇心や探究心をくすぐる豊かな環境が広がります。木漏れ日喫茶のイベントには、毎回テーマが設けられていますが、その横で子どもが思い思いに遊び始める様子もよく見られます。スタッフや保護者は、そんな子どもたちの思いを尊重して、それぞれに遊びを展開していく姿をほほえみながら見守ります。

そうした自由な空間を羽地知香先生（以下、バムちゃん）とともにつくり出しているのは、畑を所有する玉城真さん、純さん夫妻です。子育て支援の場として地域の親子に開放したいと考えたとき、当時フリーの保育者として活動していたバムちゃんを知って、声をかけました。

「育児に悩む保護者も多い中で、『ここでは大人も子どもも好きなように過ごしていい』と感じられる場をつくろうと思い立ちました。型にとらわれず、とことん子どもの目線から考えるバムちゃんの保育は、そんな方針にぴったりだと思ったん

▲木漏れ日喫茶チームのみなさん。右から玉城真さん、玉城純さん、山本雅子さん。

◀どのような場面でも大人は手や口を出さず、子どもがやりたいように作業をする様子を見守ります。だからこそ、完成したムーチーがいっそうおいしく感じられるのでしょう。

です」（純さん）

オファーを快諾したバムちゃんを中心に、美術の講師である真さん、保健師の純さん、臨床心理士の山本雅子さんなどの専門家がチームとなり、木漏れ日喫茶の活動を2017年にスタートさせました。その評判は瞬く間に広がり、今ではＳＮＳで告知をすると、30分と経たずに定員に達し、中には遠方から参加する親子もいるほどの人気となっています。

「家族に食べてもらいたい」子どもの思いから遊びは始まる

2023年２月の木漏れ日喫茶のテーマは、「ムーチー作り」でした。ムーチーとは、「もち」を表す沖縄言葉で、もち粉に黒糖や紫芋、水などを加えて、手でこねて作るお菓子です。沖縄ではもっとも寒い旧暦12月８日に家庭で作り、神仏に供える風習があります。このように木漏れ日喫茶では、毎月、季節感を味わえるテーマを設定しています。

「沖縄は１年を通して温暖で、季節の移ろいを感じづらいので、この場では四季それぞれのよさを感じられる遊びを、子どもたちに楽しんでもらいたいと思っています」（バムちゃん）

この日の参加者は５家族13人。バムちゃんが奏でるウクレレのオリジナルソングによって開始が告げられ、ムーチー作りが始まりました。ガラス製の大きなボウルにたっぷりと入ったもち粉を、家族ごとに小さなボウルに取り分けていきます。もちろん、作業の主役は子どもたち。小さな手で大きなスプーンをぎこちなく使い、「これはお母さんの分、これはお父さんの分、これはお姉ちゃんの分……」と家族の人数分のもち粉を取り分けてから、隣の子どもに大きなボウルを渡します。途中でもち粉をこぼしたり、ボウルを落としそうになったりする場面もありましたが、大人は手や口を出しません。

「こぼしても後から拭けばいいだけですし、もち粉が入ったボウルを落としても……、まあ、何とかなるんですよね。それよりも、子どもたちの『家族に食べてもらいたい』『自分でやってみたい』といった気持ちを尊重したいんです。今日も慣れない手つきで必死に取り分ける姿を見て、やっぱり遊びとは子どもの思いから始まるんだと、改めて感じました」（バムちゃん）

子どもを信じて任せる気持ちが保護者にも浸透

木漏れ日喫茶に以前も参加したことのある保護

◀「自由にやってごらん」と、子どもに任せるバムちゃんの様子を見て、周りの保護者も子どもの姿をおおらかに見守ったり、一緒に楽しんだりしていました。

者に話を聞くと、「ここでは普段よりも子どもに対しておおらかな気持ちになれる」といいます。

「いつもの自分なら『こぼさないでね』と、つい口を出すと思います。ところが、スタッフやほかの保護者の方がのんびりと見守る様子を見ていると、なんだか安心できて、その後の子育てでも肩の力を抜くことができました」

別の保護者はご自身が保育者であり、保育の参考にもしたいという思いで参加したそうです。

「保育中は、安全面を考えて口を出すことも多いのですが、『こう動いてほしい』といった保育者の思いを押しつけている部分もあったと、バムちゃんの保育を見て気づかされました。子どもを信じて任せると、多少の失敗はあっても逆にこちらが考えている以上の広がりを見せることもあり、驚かされます」

ムーチーをこねた後は、畑に生えている月桃（げっとう）*の葉や茎をみんなで取りに行き、洗った葉でムーチーを包みました。月桃の茎は金づちでたたいて繊維を取り出し、葉を縛るひもとして使います。

茎を加工していた男の子が、「いい匂いがする」とつぶやくと、バムちゃんはすかさず近寄り、「すごい、本当だ！ ほかの人にも教えていい？」と、その発見を一緒に喜びました。男の子が誇らしげな表情でうなずくと、バムちゃんはみんなに声をかけて月桃の放つ香りを楽しみました。

豊かな遊びが保障された空間で子ども同士の交流も活発化

畑で大きな鍋に湯を沸かしてムーチーを蒸し始めると、いよいよ自由な遊び時間の始まりです。畑の隣にはさまざまな遊具が設置された施設がありますが、子どもたちは豊かな自然に興味を示し、夢中になって遊びをつくり出していきました。

「泥でお団子を作ろう」「この穴に水をためたい」「葉っぱで作った舟を浮かべよう」「見たことのない花がある」等々、ちょっとした思いつきや発見から１人で始めた遊びに、ほかの子どもも加わって、グループができていきます。その中で協力をしたり、きちんと順番を守ったり、年上の子が年下の子に教えたりといった姿が、あちこちで見られました。あらかじめ遊び方が決まっておらず、自由に試行錯誤できる環境だからこそ、「どうすればもっと面白くなるか」といった発想力や探究心が発揮されて、遊びがどんどん発展していく様子が伝わってきます。

木漏れ日喫茶が自由な空間になるまでには、さまざまな試行錯誤がありました。例えば、「今日は布遊びをしよう」とテーマを決めて、バムちゃん

＊熱帯から亜熱帯に分布するショウガ科の植物。沖縄県ではハーブの一種として活用されている。

◀年齢の異なる子どもたちが、相談をしたり、工夫をしたり、教え合ったりして、遊びをどんどん面白くしていく様子が見られました。

▼子どもから教えられて月桃の茎の香りを楽しむバムちゃん。子どもの気づきや発見を敏感に察して一緒に喜んだり、驚いたりする様子が見られました。

が先頭に立ち、みんなに働きかけたこともありました。しかし、興味を示す子がいる一方で、いくら呼んでも来ない子もいて、そうした姿を見るうちに、無理に誘い込むことの意味のなさにバムちゃんは気づいたといいます。

「『〇〇をするからみんな集まって』とか『もう終わりましょう』と大人が主導するのは、この場所にはそぐわないと感じました。そこで、『〜ねばならない』を求めるのをやめて、もっと柔軟に保育を考えていくことにしたんです」

木漏れ日喫茶のイベントには50人近くの子どもが集まることもありますが、そんなときでもけんかや物の取り合いが起こることはありません。

「ここは自然豊かで、興味をもてるものがたくさんあることも一因なのでしょう。その遊びにこだわらなくても、別の遊びができる空間の保障があるので、例えば順番待ちのときもゆったりとした気持ちで過ごすことができます。ブランコに乗る順番を木に登って待つ子もいたりして、待つことを楽しんでいる様子がうかがえます」（バムちゃん）

その後、みんなで完成したムーチーを食べて、この日の活動はいったん終了。終了後も畑は開放されており、泥だらけになって遊び続ける子どもたちの歓声が、いつまでも響きわたりました。

理論と実践を兼ね備える、「スーパー保育者」をめざす日々

子どもの発達を学び始めたら保育が楽しくなった

バムちゃんは、故郷の静岡県で幼稚園教諭としてのキャリアをスタートさせました。いくつかの園を経験する中で、自身の子どもや保育に対する思いと園の方針とのギャップに、葛藤を感じたこともありました。

「園の方針に私自身が追いつかず、子どもにさせることも多い状況で、もっと自由に楽しんでほしいという思いとの板挟みに苦しみました。私も若かったので子どもの前で泣いてしまったら、みんなが『先生のせいじゃないよ』と言ってくれて、自分の気持ちがちゃんと子どもに伝わっていたと気づくことができました」（バムちゃん）

どのような環境であっても、子どもたちが「先

◀子どもたちの遊びは次第に大胆になって、水たまりにつかったり、サンダルや靴を泥に沈めたりする姿も。保護者もそんな子どもと一緒に楽しんでいました。

▶バムちゃんが「絵本を一緒に読みたい人はおいで」と声をかけると、何人かが興味を示し、読み聞かせが始まりました。

生と遊んで楽しかった」「また遊びたい」「次は何するの？」などと喜んだり、期待してくれたりする姿を受け、どうすれば子どもの笑顔や喜ぶ姿を見ることができるかを考え続けました。

そんなバムちゃんの転機となったのは、結婚で沖縄県に移住し、園で働き始めたことでした。

「子どもたちは、急に雨が降り出すとスーパーに立ち寄って、段ボールをもらって傘代わりにするんです。たくましくて、驚きますよね。そんな姿を見て、『子どもの発達の力ってすごい。でも私はまだ発達について十分に理解していない』と気づいたんです」（バムちゃん）

その後、バムちゃんは子どもの発達に関する県内外のさまざまな研修や学会に参加するようになりました。こうして子どもへの理解が深まると、保育ががぜん楽しくなったといいます。

「それまでは理想の保育を求めて環境を構成し、そこに子どもがうまくはまらないと、身を削られるような疲れを感じていました。そうではなく、『この子はなぜ怒っているのか』『次の成長には何が必要か』など、一人ひとりの発達を出発点として、子どもの言葉に耳を傾けながら環境や接し方を考えていくと、子どもが自分から動いてくれるようになることに気づいたんです。すると、不思議と仕事後の疲れが、とても心地よいものに変わっていきました」（バムちゃん）

そうした保育の姿勢は、木漏れ日喫茶での子どもへの接し方にも表れています。

準備をしすぎず、自分の気持ちをぐっと引いて、子どもの姿に合わせながら一緒に遊びをつくっていく。子どもの興味がこちらの意図とは別の方向に向かったとしても、その寄り道が子どもにとって大切なステップなのだと認めて寄り添う。子どもの姿の「予測」と保育者の「願い」をもち、子どもが育つタイミングを見逃さないようにしながら、引き算の保育を心がけています。

ソーシャルワークを学び
保護者支援の協働体をつくる

子どもの発達を出発点とした保育は、特別な支援を要する子どもに対しても非常に重要です。バムちゃんは、７年間ほど市の健診事後教室で発達障がいなどの可能性のある子どもやその保護者の支援に携わったほか、自閉症と診断されたご自身のお子さんと向き合ってきた経験などを生かして、現在、勤務する沖縄女子短期大学では主に障がい児支援について教えています。

「子どもは『この子は障がいがあるから』といった先入観をもちません。『どうすれば一緒に楽しめ

◀ムーチーが蒸し上がり、あたりに月桃の独特の芳香が漂うと、子どもたちは大喜びで駆け寄ってきました。

るか』という純粋な気持ちから、必要に応じて助け合っています。大人も『何ができる・できない』といった視点で子どもを捉えるのではなく、その子自身が何を求めているかを全力で感じ取ることから、支援は始まると思います」（バムちゃん）

バムちゃんは、子育てに悩む保護者への支援の重要性も痛感して、40歳を過ぎてから通信制の大学でソーシャルワーク（社会福祉援助、相談援助）について学び始めました。

「保護者の話を親身になって聞き、寄り添いすぎるあまりに共倒れになる同僚を数多く見てきました。ソーシャルワークのスキルは、保護者との間に適切な距離を保ちながら、保育者ができる支援を考えることに役立ちます。保護者を助け、保育者自身を守るスキルだといえます」（バムちゃん）

保護者の抱える問題が保育者の支援の範ちゅうを超える場合は、他の専門職につないで協働することを心がけています。それが、木漏れ日喫茶が多様な専門職のスタッフでチームを構成している理由です。

子どもを笑顔にする保育を地域に広げていきたい

バムちゃんは、「スーパー保育者になりたい」と、よく口にします。そのめざすところを聞いてみると……。

「実は、はっきりした定義はなくて（笑）。子どもと一緒に思い切り遊べて、しっかりと発達について語れる保育者というイメージです」

そうした思いが、保育者になった後も実践を重ねるだけではなく、発達やソーシャルワークなどの理論を学び続ける原点にあるのでしょう。

バムちゃんは、今後の展望をどのように考えているのでしょうか。

「私たちがかかわれるのは、子どもの人生の中では針の先っぽのような短い時間です。でも、そんな一瞬の出会いが、子どもの人生を豊かにするきっかけになるかもしれません。そうした素敵な時間をもらっていることを大切にして、私は子どもと接し、学生にもそのすばらしさや意義を伝えています。そして、それぞれの場所で展開される『子どもを笑顔にする保育』が次第に地域へと波及し、いずれ社会全体につながっていくといいなと思っています」

木漏れ日喫茶でも対象を広げ、医療ケアが必要な子どもや妊婦さん、これから家族になろうとしている人などに向けたイベントも、催したいと考えています。スーパー保育者をめざすバムちゃんの活動は、これからも続きます。